

特集にあたって

岸本泰士郎*

オンライン診療 (telemedicine) とは、一般に通信技術を活用し離れた 2 地点間で行う健康増進、医療、介護に資する行為すべてを指す。精神科医療においては、遠隔での診断・重症度評価・治療効果が対面評価と同等であることがすでに多く報告されており、海外では日本よりも早くからオンライン診療が活用されていたが、2019 年末まではその普及は限定的であった。2020 年から本格化した新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) のパンデミックは世界中で猛威を振るい、多くの人々のメンタルヘルスにも悪影響を与えると同時に、生活様式にも大きな影響をもたらした。このような状況の中で、感染対策の 1 つとしてオンライン診療が注目されるようになり、パンデミック下において医療を継続するための手段として世界中で利用が拡大している。WHO が 130 개국を対象に行った調査では、世界中で精神科医療の需要が増加している一方で、93% の国では医療やサービスの中断が生じており、その解決のために 70% の国で遠隔医療の導入がされていたことが報告されている。

わが国においては、法的規制の問題から遠隔医療の普及は遅れていたが、パンデミック下において、特例的な規制緩和が行われ、普及が加速しつつある。精神科領域でも実施可能な範囲が大きく広がっているが、一方で、わが国においてはパンデミック以前の普及が十分でなかったこともあり、オンライン診療の実践に不安を覚える医師も少なくない。そのような中で、本特集では精神科においてオンライン診療を活用していくため、有効性についてのエビデンス、具体的な実践上の工夫、今後活用が見込まれる分野、適切な普及に向けた課題などを解説いただいた。オンライン診療は万能ではないが、本特集で紹介したような有用性や好事例のみならず、COVID-19 パンデミックにおける医療の提供手段としてもメリットは多いことから、本特集がオンライン診療のより積極的な活用に繋がることを期待する。

* 慶應義塾大学医学部ヒルズ未来予防医療・ウェルネス共同研究講座 (〒 106-0032 東京都港区六本木 6-2-31 六本木ヒルズノースタワー 7 階)